

## 安政二年刊「照葉俄早合点二編」：解題と翻刻

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西村, 聡 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/41418">http://hdl.handle.net/2297/41418</a>

## 安政二年刊『照葉俄早合点二編』

### ― 解題と翻刻 ―

西村 聡

#### 【解題】

ここに翻刻して紹介する金沢大学人間社会研究域日本語学日本文学研究室蔵『照葉早合点二編』折本一帖は、その見返しから扉にかけて「狂雲堂老翁述／照葉／俄早／合点／安政二卯中夏新刻」と記されるとおり、安政二年（一八五五）刊のいわゆる照葉狂言本である。

表紙の題簽は「照葉早合点二編」、見返し・扉の内題は「照葉俄早合点」を称するが（本稿では『照葉俄早合点二編』と呼ぶことにする）、以下の翻刻に見るように曲ごとには曲名に「照葉狂言」を冠している。

この本の存在については、早く斎藤香村「照葉狂言雜記」（『能楽画報』三十六卷九号、昭和十六年（一九四一）九月）及び同「照葉狂言雜記（二）」（同誌三十七卷二号、昭和十七年六月）に紹介があり、

この帖は、もと一枚摺の狂言筋書で、その演奏の度毎に何枚かづゝ見物人に配布したものであらう。この憶測を更に裏書するものがある。

一、この帖は本文の長短にかゝらず、一紙に必ず一番（第

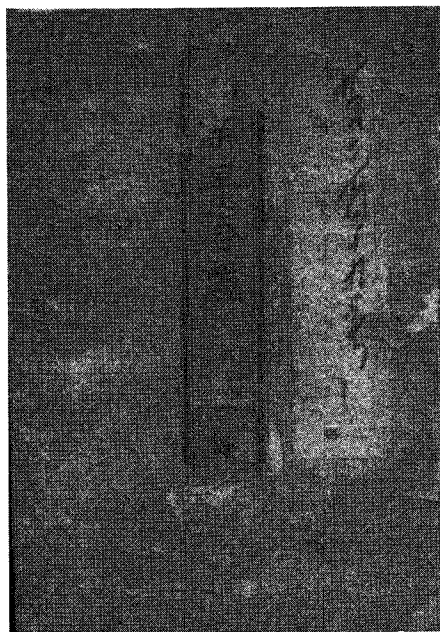
二編の鞍猿だけは二紙に互る）と定つてをり、長文のものほど文字を小さく細かく刻して居る。

一、毎曲即ち毎紙の首めの、狂言名の上に必ず割注で「照葉狂言」と入れてある。

一、毎曲欄外に「板元 表米」と刻んである。という推測と特徴が述べられている。

斎藤氏所蔵本には初編（第一編）と二編（第二編）の二帖があり（金沢大学本はその二編のみ）、初編と二編とでは、挿絵の色が墨単色から多色へ、紙が御用紙から仙華紙へ、本文も筋書きから全文に近いものへと変化した跡がうかがわれる。観客への配慮がよりこまやかになったのは、観客の求めに応じたとも見られるし（斎藤稿ではこの狂言が「相当に当つて」、観客が筋書きだけでは満足しなくなったと見ている）、観客を惹き付ける工夫の一つにこうした紙を配布したともいえる。

照葉狂言各曲の本文は、そのもとなつた本行の狂言を比べても、また照葉狂言の実際の演技に要した言葉の量からしても、長短様々



【表紙】

なはずであるが、斎藤稿に「一紙に必ず一番」と指摘するとおり、配布する紙の大きさに合わせて文字の大きさだけでなく、台詞に代えて要約を用いたり、挿絵の配置や改行による余白を調節したりして、一曲が一枚の紙に収まるようにしている。

したがって、斎藤稿にそれらを分類して、

一、在来の狂言を丸呑みにして、之れを一層通俗化せんとしたもの

二、狂言そのままの筋で行って、終りに「落」を添へたもの

三、能や歌舞伎等を取り入れ尚ほ且つ「落」をつけたもの

と三種の区分を認めるところは指摘のとおりであるが、「これが狂言通俗化、換言すれば照葉狂言発達の過程を示すものである」とい

う見解には、照葉狂言の芸態が一・二・三の順に発達したのか、曲によって芸態が異なるだけか、あるいは一・二・三のそれぞれにおいて紙面の制約で粗密が生じたのか、一概に「発達の過程を示す」とまとめるわけにはいかないように思われる。

照葉狂言本の先行研究として斎藤稿が今でも基本文献たり得ているのは、照葉狂言本の諸本を収集し、諸本の系統分類を行ったことによる。斎藤稿は『照葉俄早合点』以外にも、『照葉爾和可』『浪華風流爾和可狂言』『風流照葉狂言集』『手爾葉狂言俄』『照葉狂言杓子定木』を分析・分類の対象とし、これらを、

甲、照葉狂言俄早合点

乙、照葉俄狂言系

丙、風流照葉狂言集系

の三系統に分類して、照葉狂言本諸本はこれら「三系の外に出でない」とする。甲・乙の二系統は安政二・三年の梓行、といつても甲に対して乙は「全くの俄に墮してゐる」、「急角度の異変が加へられである」し、丙の内、改題後摺りの『照葉狂言杓子定木』は明治十六年の刊行であり、「発達の過程」はこうした諸本の変遷のなかでたどらなければならない。

そして『照葉狂言杓子定木』の刊行が明治十六年まで下るから、

数点現存している照葉狂言の台本の中では、最も新しく、明治一六年（一八八三）に出版されたもので、「照葉狂言」というものはや消滅してしまつた芸能の最終的な芸態を知る上で、貴重な資料と成りうるのではないかと考える。（根岸理子「翻刻『照葉狂

言杓子定木』『歌舞伎研究と批評』二四号、一九九九年二月)

といわれるように、『照葉狂言杓子定木』に照葉狂言の「最終的な芸態」を見るべきなのか、それともこの系統のもとになる『風流照葉狂言集』は甲乙と同時代の変種であり、様々な照葉狂言が並行して試みられたと見るべきなのか、いましばらく種々の観点から検討に時間を要するであろう。

根岸稿に翻刻された『照葉狂言杓子定木』は初編に〈富士松〉〈雷り〉〈萩大名〉〈花折〉〈末広〉の五曲、後編には〈靱猿〉〈二九十八〉〈腰折〉〈抜がら〉〈三人片輪〉〈薩摩守〉の六曲を収載している。また根岸稿に続いて、村戸弥生ほか「石川県立図書館李花亭文庫蔵『都風流照葉狂言盡し』翻刻」(金沢大学『市民大学院論集』一号、二〇〇六年三月)に翻刻された『都風流照葉狂言盡し』には〈墨ぬり〉と〈釣狐〉の二曲を収載、翻刻附載の李花亭文庫蔵『風流照葉狂言集』には初編に〈富士松〉〈雷り〉〈萩大名〉の三曲、二編に〈末広〉〈花折〉〈薩摩守〉の三曲を収載、初編の目録にはその続きに〈舟渡賀〉〈抜がら〉〈三人片輪〉〈しびり〉〈あくた川〉〈つり針〉〈靱ざる〉〈入間川〉〈悪坊〉〈かねの音〉〈かくし狸〉〈花子〉〈阿曾〉〈二九十八〉〈懐中箆〉の十五曲の名を記載し、「追々後編二出ス凡七十番在之」と記して、照葉狂言の所演曲(構想段階のものも含むか)が七十曲ほどあったことを伝えている。

これら丙の系統の諸本に対して、村戸弥生ほか「西宮市笹部桜コレクション―白鹿記念酒造博物館寄託―『照葉狂言集』翻刻」(金沢大学『市民大学院論集』二号、二〇〇七年三月)に翻刻された同本は、題簽

には「照葉狂言集全」と書かれているが、その中身は本稿で取り上げる甲系統の『照葉俄早合点二編』と同じものと見られる。ただし、曲の収載順や収載数は一致しない。『照葉俄早合点二編』は〈狐塚〉〈柿山伏〉〈隠狸〉〈朝比奈〉〈武悪〉〈宝の槌〉〈子盗人〉〈止動方角〉〈千鳥〉〈清水〉〈文使〉〈腹不立〉〈芥川〉〈舟渡賀〉〈舎弟〉〈瓜盗人〉〈靱猿〉の十七曲、『照葉狂言集全』は〈狐塚〉〈柿山伏〉〈隠狸〉〈朝比奈〉を欠く一三曲を収載、〈舎弟〉〈瓜盗人〉の二曲は〈武悪〉の前に配置する。

本の体裁としては『照葉俄早合点二編』の方が整っている。曲ごとには同じ板木を用いながら、『照葉狂言集全』の収載曲が少なく、かつ収載順が一部異なるのは、『照葉狂言集全』の方が斎藤稿にいう演芸場で配布された筋書きの紙を集めて綴じ直したからとは考えにくく、「板元表米か或はこの板木を譲受けた者」(斎藤稿)が、『照葉俄早合点』とは別に「再摺新装」(同前)したのである。その際、『照葉俄早合点』の書名を踏襲せず、丙系統に近い書名を選択したことになる。

もちろん『照葉俄早合点』の刊行時点でも、曲ごとには「照葉狂言」を称していたが、「照葉狂言」を構成する要素は「俄」(終わりに「落」があるあたり)一つに限らないから、「俄(爾和可)」を表に出す乙系統の書名より、広く「照葉狂言」を称する方が定着しやすかったであろう。丙系統の『風流照葉狂言』が「風流」を冠してその歌舞伎性を表に出し、やがて『照葉狂言杓子定木』のようにその冠を外す流れも同様である。

「早合点」は「照葉狂言」の内容が登場人物の早とちりを面白くとする意よりは、観客のための早分かり、簡便な鑑賞の手引きの意を込めたと思われる。辞書類にそのような用法の指摘はないが、書名としては江戸後期から明治期にかけて、『茶番狂言早合点』『声色早合点』『窮理早合点』『浄瑠璃早合点』などに「早合点」の使用が認められる。観客のための早分かりを心掛けても、思わぬ早とちりを誘発しかねないという謙辞なら、定規の規格を外れる「杓子定木」も同類といえる。

観客のための早分かりには挿絵が有効であったと思われる。いくつか特徴的な例を挙げておきたい。最初の〈狐塚〉では、鳥追いの二人が主人を狐が化したと決めつけ、青松葉をくすべて尾を出させようとするうちまちがいに気づく。そして逃げる二人を主人が追い込む。二人が主人を鳴子の縄で縛るト書きや台詞は記載しないが、この終わり方は大藏流によるらしい。また、本文の約三分の一を鳥追いの小唄（引く物尽くし）が占めるのも、大藏流の特殊演出（狐塚小唄入り）を踏まえることを明示するかに見える。

ところが挿絵では主人と（二郎）冠者が縄で縛られ、（太郎）冠者が青松葉で主人をくすべるところが描かれる。これは太郎冠者がまず二郎冠者を狐と決めつけて縛り、次にまた主人を狐と決めつけて縛り、狐の皮を剥ぐ鎌（鷲流は棒）を取りに行く間に二人が縄を解き、太郎冠者に仕返しをする和泉流（太郎冠者を倒して去る）・鷲流（太郎冠者をくすべ、逃げるのを追う）の進行を描いていることになる。

主人（画面左）と（二郎）冠者（画面右）が後ろ手に縄で縛られ、（太

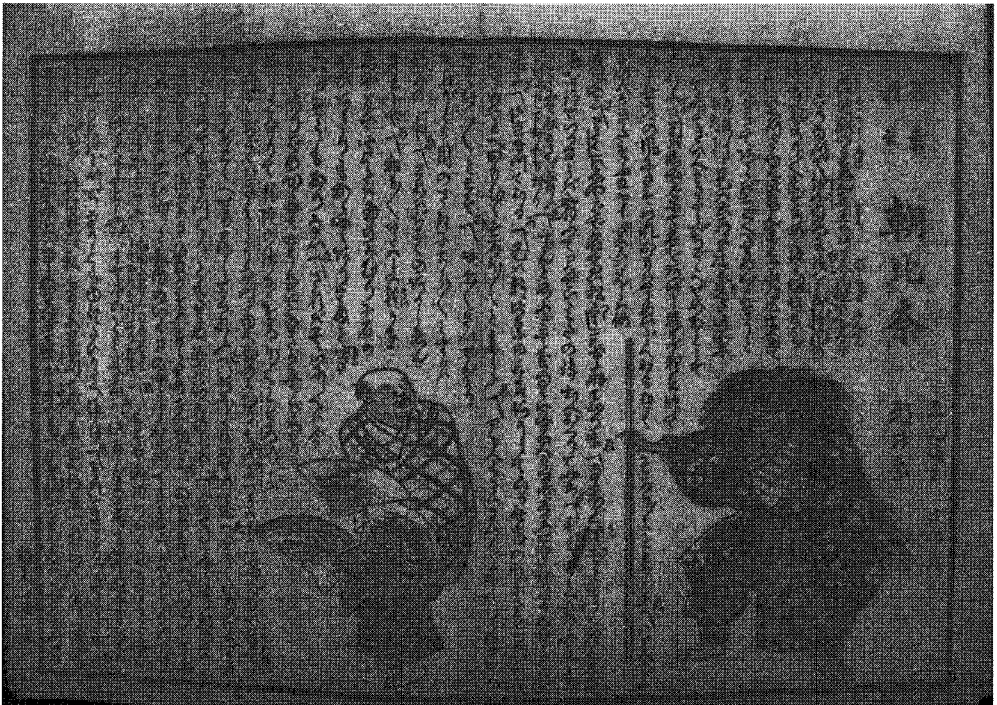


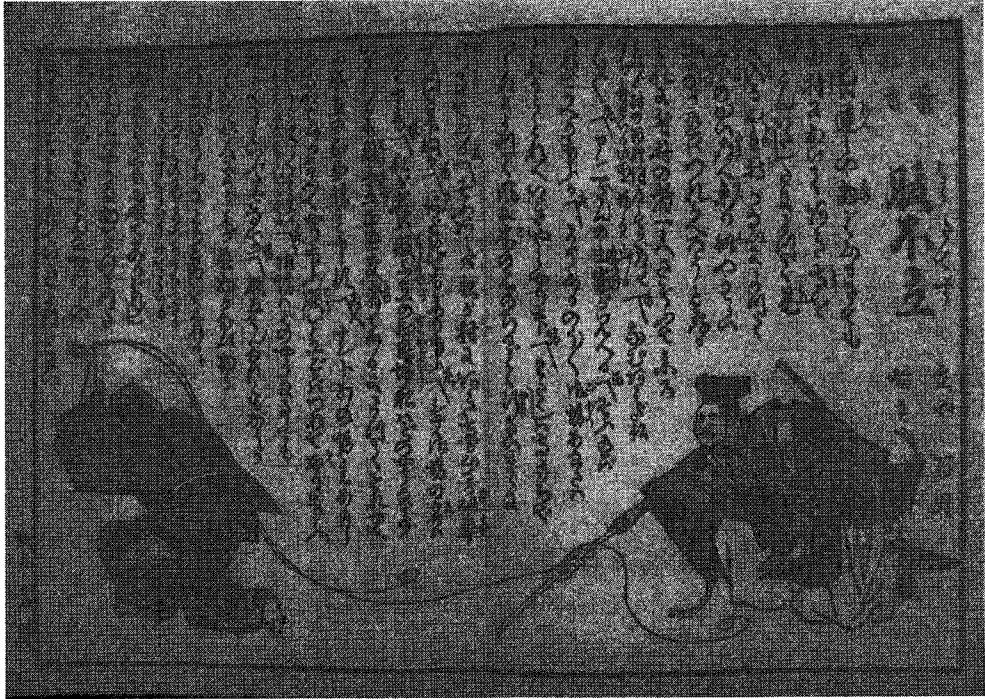
郎)冠者(画面中央)が青松葉を持つ絵は、和泉流の進行に近い『続狂言記』(元禄十三年(一七〇〇)刊)にも使用されている(主人と二郎冠者の位置が左右逆になっているし、舞台も描いている)。前掲『都風流照葉狂言盡し』収載の(墨塗り)(釣狐)の二曲の本文が末尾部分を除いて『狂言記』とほぼ同じであるとの指摘があり(前掲村戸ほか稿)、本書の(狐塚)でも『続狂言記』を参照してよいはずであるが、『続狂言記』の(狐塚)本文は挿絵と同じく和泉流に近い。

大蔵流の本文を選んだのは引く物尽くしの小唄を活用するためであるとしても、その進行と異なる演出を描いた意図は、照葉狂言の実際の舞台では二通りの演じ方をすることを示すのか、それとも本文と挿絵の不一致がいかにも早合点で面白いと見る人に感じさせるのか、(狐塚)の例一つでは今のところ見当がつかない。

次に(朝比奈)では、画面には閻魔王と罪人を描いて朝比奈本人を描かない。朝比奈が登場しないのではなく、朝比奈の前に登場するもう一人の罪人の方を描いて、そこに照葉狂言らしさを表している。この罪人は娑婆で名を上げた照葉狂言師を名乗り、また娑婆で名高い松尽くし三本扇とも名乗る。挿絵には両手と左足に開いた扇三本を持つて舞う姿が描かれている。本書収載の照葉狂言作品を演ずる合間に、こうした松尽くし三本扇の芸などを挿入し、照葉狂言師の別名として通じていたらしい。(朝比奈)では朝比奈が登場して和田合戦の物語りをする前に、その前座芸を照葉狂言師が披露して、対照的な朝比奈の力強さを引き立てる役割を担う。

照葉狂言師は松尽くしの三本扇の芸を閻魔王に褒められ、次に来





る罪人と一所に遣るから待てと止められる。一所とは芸を見せる前に約束された弥陀の浄土を指している。朝比奈もまた閻魔王に所望された和田合戦の物語りに合わせて閻魔王をひっくり返し、行きたい方へ行けと通過を許される。本行の狂言では閻魔王に案内させて浄土へ向かう結末を、照葉狂言では照葉狂言師が伴われて行くことを申し出て、朝比奈から汝はこの六道の辻にとどまらねばならないわけがあるといわれ、そのわけを二人で獄道の連れと解く落ちが俄の要素であり、さらには大阪の蕩子らが始めたという照葉狂言の来歴（喜田川守貞『近世風俗志』）を思い出させるところがある。

もう一例、今度は〈腹不立〉の挿絵に注目しておきたい。腹不立の正直坊を名乗った坊主が庄屋と百姓になぶられて腹を立て、腹を立てるのではない、業が沸くといって追われる筋は、諸流と大きな違いはない。照葉狂言の坊主は業が沸くといったあと、その恨みで取り殺すと脅し、土蜘蛛になつて源頼光に蜘蛛の糸を掛けて逃げる。脅してから「は入る」とあり、一旦幕へ入つて土蜘蛛になり、それが実際に土蜘蛛の扮装に変わるかどうか、挿絵では後ろ姿の坊主のまま、頼光に見立てた庄屋に蜘蛛の糸を掛けて、逃げて「はいる」。

扮装を変えないなら、蜘蛛の糸は懐中した物を使えばよいので、一旦幕へ「は入る」意味は分らない。後ろ姿では見えない顔に鬼形の面を掛けるためであろうか。庄屋の目には「今の坊主がくもに成てまいり」と見えている。蜘蛛になつたが坊主と知られる、生半可な変身ぶりが挿絵からも伝わってくる。

本行の能の〈土蜘蛛〉では蜘蛛が糸を掛ける場面は前場と後場の



それぞれにあるが、僧形かつ蜘蛛の姿をした前シテが千筋の糸を掛けて頼光を苦しめる場面を、この挿絵は連想させる。太刀を抜く頼光は庄屋も扮装を変えて頼光を演ずるということではなく、もちろん頼光が照葉狂言の舞台にもう一人登場するわけでもない。挿絵の頼光は土蜘蛛を気取る坊主の目に映る姿を描くのであり、ト書きの説明も坊主の側に立ち、坊主を土蜘蛛、庄屋を頼光と呼ぶのである。

しかし、一方的な激情に駆られて掛けた蜘蛛の糸は、庄屋の側に立てば、「うどん見たやうな物」にしか見えない。鯁鮓を掛けて、迂鈍な坊主が蜘蛛ならぬ雲霞と逃げて行く。その地口が落ちとなくなっている。

最後に、この曲のみは二枚に分けて摺られている〈靱猿〉に言及しておきたい。〈靱猿〉は『照葉狂言杓子定木』にも収載されていて、本書『照葉俄早合点二編』との比較が可能な曲である。『照葉狂言杓子定木』の〈靱猿〉の特徴は、〈靱猿〉と題し、本行の狂言〈靱猿〉の筋を踏まえながら、猿も猿引きも出ず、代わりに樽と樽引きが出て、樽引きは樽廻しの芸をもつて得意先を廻るところに認められる。大名は樽の酒を貸せと脅し、酒をつがせて肴に芸を所望する。樽引きは樽を囃して踊らせる。ト書きには「ト与二郎ふりに成竹のむち持こう見樽をおどらす」とあり、与二郎ぶりとは『近頃河原達引』の猿廻し与次郎をまねるのであろう。囃子には楽屋から三味線が合わせ、かぶく言葉に大名も踊り出す。

歌舞伎を利用して本行の〈靱猿〉を大きく逸脱した『照葉狂言杓子定木』の収載曲に対して、『照葉俄早合点二編』の〈靱猿〉は本行

諸流の進行を一部省略する（猿が殺される運命を知らずに櫓を押す芸をするあたりを記載せず、助命の礼に猿を舞わせる時の猿歌の歌詞も短い）もの、何が落ちかよく分からず、本行の〈鞞猿〉を見慣れた者に違和感を与えない作りになっている。前掲斎藤稿にいう『照葉俄早合点』収載曲の三種の区分の二、「狂言そのまゝの筋で行つて、終りに「落」を添へたもの」とはこの〈鞞猿〉などを指すのであろうし、その三、「能や歌舞伎等を取り入れ尚ほ且つ「落」をつけたもの」とは、本稿で取り上げた範囲では〈腹不立〉が該当するが、『照葉狂言杓子定木』の〈鞞猿〉はさらにその三を進めた形になる。そして二つの〈鞞猿〉は互いにそれぞれの面白さを引き立てる関係にあると思われる。照葉狂言の發達史をたどるには、各本に重複する収載曲をこうした視点から検討する作業が欠かせない。そのために『照葉俄早合点初編』をはじめ、未見の諸本の探索を続けてゆきたい。

なお、本稿では収載曲の本文を翻刻し（表紙・見返し等は本稿の最初に引いた。刊記はない）、挿絵部分は割愛した。本文には難読箇所が少なからずあり、誤読の混じることを恐れる。大方の御批正を仰ぎたい。また、本書の原文には今日では当然配慮の必要な表現が含まれているが、原文の歴史性を尊重してそのままとした。

### 【翻刻】

照葉 狂言 狐塚 主 太郎くわじや／二郎くわじや  
 「是ハ此当りの者でゐる当年ハ田かようふ出てくるによつて兩人をよび出し田へ鳥を追につかハそふと存るヤア／＼太郎くわじや二

郎くわじや有かヤイ 太郎二郎「ハア御前に居り升「ねんのお早かつたなんじ呼いだす事別なる事でない当年ハ田かようふできたによつて鳥を追ふてこい 兩人「ハアかしこまつてゐる 主「このなるこをかすほどに兩人して此なるこで鳥をおへい 兩人「かしこまつてゐる 主「はやふゆけ 兩人「ハア（是を兩人進行してなるこをたいていづり合持行せられたるこつな所はしち、二人して引行田へ参り鳥をおふ此とき二人はたいていづつて小うたりを兩人しち、うたひ「ひくくとしてなるこ引神の前にハみしめなわ引ほとけの前にはせんつな引はしの上にハおもてこま引はしの下にハのほり下の舟引われらハこゝにてなるこ引 太郎二郎それ鳥じやちやつおう。ほいくなるこ引いそ引ものをうたハんく春の小田にハなわしる水引秋の田にハなるこ引名所みやこにきこへたるあさのぬまこハかつミくさしのふの里にハもちすり石おもふ人にハ引てみせばやあねハの松一枝塩がまのうらには雲はれてたれも月を松しまひら泉ハおもしろいとゞさしき秋の田に月いづるまでひまなきをいささしおいて休まんく（此所共小うたりを引く人兩人はり、をがして一人は右のいはりへはいる）「このところへ主かつら桶をさけてさみしさに酒を兩人へのましくる二人ともこれをきつねなりとおもひ酒をのまずみなするそれより二人して主を青まつばをもつて右左りより尾をたせくとくすべる 主「ヤイク身共じやなんとするく 二人して「尾をたせく 主「ヤイク身ともじやといふに 兩人「これハマことこのたのふたおかたてゐるかア、ゆるさせられく 主「何のゆるせあの大ちやく者やるまいぞく

板元表米

照葉 狂言 柿山伏 山伏／柿主

「ねとまるであらふ

黒果 隠狸 主ノ太郎くわじや

主「是ハ此当りの者でゐる聞バ夜前太郎くわじやが夜こうにいて大きな狸をつり取たると申事でゐるに依て是へ呼出し尋よふと存るヤイク太郎くわしや有か 太「ハア御前に居升 「汝ハ夜前やこうにいて大きな狸をつりたるといふ事じやが実かぢやうか 太「夜前にかぎりしき一寸も出升ぬそれハない事でゐる 主「夫ハはやまつた事いふた汝が取つたと聞たによつていつれも狸汁をするといふて申入た 太「それハ又はやまつたこと被成升た今にもお出被成ハなんと被成升 主「さてく是ハこまつた事じや上野の市へでもいたら狸が有ふか 太「何が上野ハ大市でムレバないとも申され升ぬ 主「汝大義ながら狸を求めてこい 太「かしこまつてゐる 「エイ 太「ハア上野 夜前取つた事ハ違ひハなけれどもかねてくれいとおせならバめいわくするによつて買行とハいつハリ売に参るやべは入 主「太郎くわしやが取つたに違ハなけれ共あのやうにいつハリをいふ是方酒入のよういを致し上野へ参りいつハつて狸を取ふと存る 行其所へ太師くわしためきをせうりに出る太師出合太師わつくりしてたぬま 哥○あんの山からこんの山までとんで来たるハ何ざぶろかしらにふつくとふたつほそうて長ふてちやつとすいしたうさぎじや 主「おどろかしてやらふと存る 是より五斗になりたぬが 太「今打してつほうハあんにひゞきてむかふに音なしきてハ玉なきからつてつほうよな 主「合せりふよろしく 御ゆだんなさな三

「コレハ出羽の羽黒山方かけでの山伏でゐる此たび大峯かつらきをかけたる今下向でゐるまづそろりくと参らふ道 イヤ是まで参りたれバいかふくうふくになつた此あたりは何ぞくふものハないかしらぬイヤ是に一だんの柿の木が有上右をほり三度打おとす又かつら柿へおとす 主「是ハ此あたりの柿主でゐる当年ハ柿のなり年でゐるによつて柿はたを見舞ふ存るのとはたのおとて有を見る 道行有て柿はたへくると木 主「これハいかな事何ゆへにこのやうにたねが落ちて有しらぬイヤ落ちて有も道理じやあれに山伏が柿をくらふてゐるにくいやつじや引落してくれふははかくれする 主「おろかなやつじやあの大きなからだを葉がくれをしておるこれハちとなふつてやるふイヤこれハ人かとおもへバ人でハないあれハとびじや 山「これハ人でないとびじやといふそれがしとびに見へるかしらぬ 主「とびならなきそふなものじやなかずバ人か人ならおろしてくれふ 山「これハなかずバなるまいひいひよりろく 主「されバこそなきおつたこれかゝるからすくまはすおたふたにたいふに三を舞すこのよなはなは山伏大さにはらまをたてらしたるあし立かま天もわらひては入所を山伏のりもすしやきりにいたす 「これより柿主大きにこまりこれをいのりもとせバこんどハ又ぐにやくになるゆへなをこまり三度めにハ元のことくにいのりもどす 山「それがしもおちた時いかふこしを打てゐるによつて何卒此こしをりやうじしてくれい 主「それがしハリやうじハ急でものじや直しておまそふ山ふじしなまゐる 山「それかし此柿の木になじミになつたよつて此下でとめてくれ 主「こんな所てとまられる物か 山「こゝてとまらねバならん哥がある 主「それハどのやうな哥でゐる 山「ほのくとあかしの浦のあさきり嶋かくれ行船おしそ思ふ 「夫ハ人丸の哥じやないか 山「じやによつてとめておくれ 主「それハ何ゆへ 落 山「柿の本に 主



照業 武悪 主 太郎くわじや／武あく

主「誰いぬかく誰もおらぬか 太郎「召升か 主「召升かア「さいぜんから声のかれるほど呼に何を仕て居た 太「御つぎに御用を仕てをり升た 主「ぶ奉公の武悪めハ何とした 太「けさも私方迄申越升た大分気色もようムるによつて今日ハ御奉公に出ようかあすハ参らふかと申こし升てムリ升 主「武悪か取なし聞事てムらぬけふハ心が直らふかあすハ心が直らふかと思へども最早かんにん袋がきれた今日かれをせいはい致す討手ハ汝を遣すさやうに心得 太「コハ一たんの御腹立ハ御もつともムリ升共何卒慈悲ハ上より下ると申事もムリ升れバ今一度御りよけんの被成て被下升せ 主「だまればやかんにん袋がきれた此太刀ハ重代のわざ物なれ共汝にかす早ふ打てこい 太「さほど迄おぼしめしつめられてムるか 主「とく打て 太「ハア 道行「武悪の道へ行 それがし御前の取なしをいたし置たるによつてさゝげ物に川魚なり共さゝけよと申て池まで武悪をおびきいたし其所にて立廻り有て武悪なげくに付太郎命をたすけて別かへる 道行 只今の武悪ハたすけ帰る所でハなかつた物をいたすまじきハ宮仕でムるあなたがよくバ此あなたが悪いイヤこれハ打たと申上よう何かと申内はや戻たたのふだ御方ハムリ升かムるか主「太郎くわじやもどつたたく 太「只今帰り升た 主「シテ武悪めハ 太「討升てムる 主「しかと打たか 太「中く 主「何打たアさて汝を遣した跡で武悪ハ心得の有者なれば汝一人でハ心もとなく人をつけて遣したればよかつたと一向むねいたした 太「夫ハたバかつて打升た主「ナニたばかつて打た夫ハでかした今汝が武悪を討たといふたを

聞心が晴ととした此やうなおもしろい時ハ東山へでも参らふサアくこいく 太「参り升 道行 主「さて太刀の切あぢハ何とて有た 太

「何がわざ物の義でムリ升によつてたゞ水きハへ打こむやうでおほへがムリ升なんだ 主「さだめてそふで有ふ 此と武 武「太郎くわじやのかげで命をたすかつたによつて清水のくハんせ音へ参らふと存る 此とらて手に出申あかくれるを見に行本筋とめて見に行て武あくに命あうれいに成ていと申つける 太「何が御目にかゝつたしらんあの高見

へ上り升と三丁や五丁ハありのはふ迄も見へ升が武悪ハさておき人かげも見へ升ぬ 主「なれども今のハたしかに武悪て有たが 太「イヤ申こゝハ鳥辺野てハムリ升ぬか 主「鳥べのが何とした 太「さだめてかれがゆうれいでかなムリ升ふ 主「何といふ武悪がゆうれいといふか其義ならバ外に道ハないか 太「一すじ道でムリ升る

主「其義ならハ遊参ハいつ出よふとまゝじやこれ方引かへそふそれ何やら出おつた 太「何やら出升てムる 主「道にてあきやうな物に出合言ばをかけんなんだと有てハ後なんもいかゞヤイ夫へ出たハ何者じや ぶ「武悪が幽霊でムる 主「ヤイく武悪が幽霊じやと

やい 太「さやう申升 後方主があくと ぶ「大殿さまがあなたにお目にかゝつたら御供してこいと仰でムる 主「それハ無分別じや私ハ此世で永く弔升ふといへ ぶ「夫ハ比興でムる 主「ア、ゆるせく 太

「チャト逃させられく 御比興でムるく 主「ア、ゆるせく 板元表米

照業 宝の槌 主 太良冠者 すつぱ

「是ハ此あたりの者でムる天下おさまり目出度御代の事でムれハあ

なたこなた御参くわい御宝くらべハ事ちよじた事でムるそれに付近  
くに目の前にげんきどくの見へる宝をくらべさせられうとの御事じ  
やによつて太郎くわしやに都へ求にやろふ存るト

太「宝買ふくす」イヤ田舎者と見へてあれにわつぱといふて  
いるきやつにあたつてみよイヤのうくそこな人 太「のふとおしや

るハ身どもの事でムるか オ「いかにもこなたの事じやこなたハ都  
の町を何をわつぱといふておあるきやる 太「イヤそれがしハ田舎

者の事でムればこハ高にムるによつてわつぱと申升た オ「こなた  
のそのわつぱとおしやたをとがめるでハない見ればこなたハ何やら

たづねていやしやる事によつたそなれハおすへてもおまそうかと  
いふ事じや 太「されバ宝をたつね升 オ「すれバこなたハ仕合も

の落中に人多しといへ共こなたが尋る宝やハ身ども一人てムる 太  
「すれバ私ハ仕合ものでムる其義なれば目の前でけんきどくの見へ

る宝売て被下かす「ヲ、やすい事じや売ておまそふしバラくそれに  
まてこのばをもうる 是ハ宝來の嶋なるかくれみのかくれ笠うちでの小づ

ち此三ツの宝を鎮西八郎為朝が取て御帰朝被成たをかくれみのとか  
くれ笠ハ外の御大名へ買にやれ打での小づちだけハのこつて有によ

つてこなたがほしそふにおしやるによつて売ておまそふさりながら  
これにハとなへるじゆ文が有是をおすへておまそふ宝來のしまなり

くおにのもつ宝ハかくれみのにかくれがさ打での小づちしよぎや  
うむじやうくの月。民国にぐわつたりこれをとなふる事なれば何に

てもほしいものが出る事じや 太「それハかたじけなふムる。それかたいこの  
すつは本願くわしやのうしろ見へかくれについて行主じゆ文となへ家を打出して反せる此ときすばまが打出せといふこゝにいふはり出す

某品にはじめ願つきにわざと又上下それよりやこほり出すつばやこゝとなりてとんと出る事とつこのふりを解か見つけられ「みやこのす

つばやと主太郎と  
してなぐり商人は入  
落 オ「はるくと来て銭もうけにならず身共をすつぱ  
のもじたのいふてこれハそれかしをなぐり物にあハしたのじや

板元表米

子盗人 盗人 女/主  
女「さてもくようおよる事かなおざしきにそつとねさし升ふのふう  
れしや下にねました此ひまにゆるりと茶をたべて参らふ ぬ「これ

ハ此あたりの者でムるが当りの衆と申合手なくさミいたしてムれハ  
仕合が悪うムて金銀ハ申におよハず女どもの手道具までことごとく

打こみさしかりめいわくいたす所ておもひ出した事がムることゝに  
唯どのと申て有とくなが人がムる今夜あれいしのび何なりとも取て参

らふと存る 何かと申内はや是じや中くこれハ表からハはいられ  
ぬ裏へまハラふこれハまたへいのでがあハすに有のこぎりを持てき

たまづ切あけふぎしくめりくなつたかくたれも聞付ハせなんだ  
と見へるまづくごろふヤツトナこれが椽さきじや先あま戸をあけや

ふさらく是ハ有明がともして有何かよいものが沢山にとりみだし  
て有ふるかま茶わん茶入さてもく能道具そうなどれ一品でも一も

とで有そふなこれに又よい小袖がある是ハちやうくの事じや先取  
てかへらふ是ハいかな事子がねさしてある扱もくうばと申ものハ

わうちやくなものじやねたまにどれいやら行おつた扱もくよい子  
じやなんぞげいがあるかかふりくハ何とじやさてくかぶりなるハ

しほらしい事じや 女「御坐敷に盗人かは入居申くムり  
升かムるか盗人かは入居をさまをだいて居ます 主「何んといふ

いたす内とつけ

盗人がは入た心得た表へ人を廻せとこに居おる一打にしてくれふ  
女「ア、あぶなふムり升まつまたせられ升せいぬ「これく盗  
人でハない御座敷見物にきたのじや 主「まだそのつれをいふかど  
う切にしてくれふ 女「ア、かなしやわ子さまがあぶなふムり升  
「イヤくまつ二ツにしてくれぬ「コレく切が実正なら先此子  
を切サアくきれく 主「きらいでとつちへうせる 落 女「なふ  
これハいかな事わ子様を捨て逃おつたなふいとしや疝氣がおころふ  
かしらん

板元表米

悪業 止動方角 主／太郎くわじや

主「是ハ此当りの者てムる此中ハあなたこなたの御参会ハおひたゞ  
しい事でムるそれに付山一ツあなたに御茶の湯に参るそれに付太郎  
くわじやをよび出し申付る事がムるヤイク太郎くわじや有かヤイ  
太「御前におり升 主「ねんのうはやかつた別の事でハない今日山  
一ツあなたに御茶の湯か有是へ参らねバならぬ汝ハ伯父の方へいて  
手まへハ茶をさらし升たにより極上一袋わたしに御かし下されとい  
へまた各ハ馬上でムるによつて御馬をかして被下といふてかつて  
こい 太「かしこまつてムる 主「まだ有いつれもお太刀を持せら  
れるによつてお太刀も御かし被下といふてかつてこい 太「かしこ  
まつてムる去ながらいかにおぢご様でもそのやうにこどくく御か  
し下されまい 主「イヤくくるしうないおつつけもどし升ふといふ  
てかつてこい 太「心得升た 主「エイ 太「ハア「こら御お太刀持かへる「あ

まり延引にて見に参る 太「うれしやくまんまとかりすましたいそ  
いでかへるふ 主「太郎くわじやめハ何をしておるヤイそこなやつ  
おのれハなにをしていた各ハはや御いでなされた身共一人じや  
太「こなたにハ聞へ升ぬさまくの物をいろくと申てかり升た 主  
「なにをぬかす 太「さてもく何をいハるゝこれほどにいろくか  
つて参るにあのやうにはらを立らるゝ 主「ヤイクおのれハそこに  
何をしてあるか早ふうせぬか馬にひつそふてこい 太「心得升た

主「是ハいかな事そのやうにしおる跡からうせい 太「心得升  
たうしろにてせきはひすれハはながある  
ほさつしつまり給へ止動方角と申としづまるとかる時に聞てかへる  
太「にくさまもにくし落してやろ 主「はあから主馬する 太「じやくれんどう  
じ六万ほさつしづまりたまへしどう方角 又エへんく

桶と太刀を持行太郎くわじや先ほどの仕かへしにいろくさまくの  
事を言ふ主はらを立て 主「のきおろふ 太「エへんく  
主「ヤア是ハ身共じや何と仕おる 太「ア、ゆるさせられいく 主  
「やるまいぞく

板元表米

悪業 千鳥 主 太郎くわじや／酒や

主「是ハ此当りの者てムる先太郎くわじやを呼出し酒やへ酒を取  
遣ふと存るヤイク太郎くわじや有かヤイ 太「ハア 主「いたか

太「御前に居升 主「はやかつた汝呼出すハ別の事でもないいつもの酒やへいて酒を取てこい 太「かしこまつてハムれども内との算用残がムれば中く渡し升事でハムリ升ぬ 主「其義ならバ汝ハ酒やの亭主とあい口じやと聞たなんなりともおもしろい事いふて取てこい 太「さやうなれハなるかなるまいか存升ぬが先いて参り升ふがいつとつてきてても太郎くわしや一ツのめと 太「ヤイク皆までいふな此たび取てきたならバ汝に口ひらきをさすほどにせひども取つてきてくれい 太「さやうなれバまづいて参り升ふ 「はやくゆけ 太「ハア是ハめいわくな事い付られた参らずバなるまい 何かと申内はや酒やじや先あん内をこわうものもう さか「表にもものもうと有案内ハたそ 太「いやわたたくしてムリ升 さか「イヤ太郎くわしや汝をいかふまぢかねていたわい 太「なんていの さか「なんていのといふてなんじ内との算用ハ何としてくれる 太「アノ算用でムるか夫ハけさも申出しており升た持て参り升ふと存じてわすれて参り升た又つぎのあても持て参り升ふ さか「其義ならバちかハぬやうにしてくれい 太「心得升たさて酒をつめて被下 さか「先算用をせずバやる事でハない 「そふおほせられるで有ふと存此たびの代ハ持て参り升たつめて被下 さか「何かハリハ持てきた其義ならバつめてやらふ 太「是ハようつまつてムるか さか「是ハ外へやるのなれ共先汝の方へやる 太「さて世間ていかふこなたの酒を人がほめ升 さか「何とて着る 太「こなたの酒を呑でから外の酒ハのめぬといふてほめ升 さか「それハ悪ふ言るゝやうになふて悦ぶ 太「こなたの御仕合でムる さか「是ハ忝ふムるヤイク代ハ何とじ

や 太「ハアもつてムるかははいつもの格で持て参らふと致升たト本番とどうささ さか「落ハせなんだか 太「落し升た物でかなムる一寸しいくとうたへる いて見て参り升ふ さか「ヤイク見に行事ならバ桶ハそこにおいて汝ばかりいけ 「私ばかりでムるかさやうならバ落ハいたし升ぬかさか「汝ハきこへぬ者じや代のある時ハよそへ酒買にゆく又かハリおとしのないう時ハこちへ酒を取にける 太「いつ外へ取に参た事がムリ升かさか「此中酒を取にこぬがしやうこじや 太「それハ此間尾張のつしままつりを見に参り升て取に参り升せなんだ さか「其義ならバ其つしままつりを咄て聞せ 太「是ハ貞白い事でムる先美のぢにかゝり升と小供が千鳥を伏るていをして御めにかけて升ふコレよりたるを鳥のていにしてまはるまにたるしてのこととす又山を引まねをしてかつら桶をまつた飯出にしてひく さか「又其樽をどこへ持て行またしても樽を持てのかふくとするゆへおもしろない此たびハたるのいらぬ事をはなして聞せ 太「こゝにやぶさめと申ことが有是を咄して聞し升ふかさか「これハ樽ハいらぬか 太「馬が入升 さか「身共が内に馬ハない 太「これに竹つへかムるによつて竹馬にして行升ふこなたハばゝ先払て被下 さか「心得た 太「お馬か参るぞ さか「ばゝのけく 「お馬が参るぞ 「ばゝのけく 太「お馬が参るぞ さか「その樽を持どちへ行 太「たのふだおかたへ御馬が参るぞ 落 さか「其樽を持汝千鳥いつくへ行やるまいぞく

板元表米

照葉 清水 主ノ太郎くわじや

主「是ハ此当の者でムる此間ハあなたこなたの御参会御茶の湯ハ事

長した事でムるそれに付それかしも近と茶の湯を致そふと存るヤイ  
く太郎くわしや有か 太「ハア 主「いたか 太「御前におり升 主  
「ねんのふはやかつた汝をよひ出すハ別の事てハないが茶の湯を  
いたそふと存るにより汝大義ながら清水へいて水をくんでこい 太  
「かしこまつてハムれどももはや七ツ下りてムる七ツ下て清水へ参  
り升とかごぜがするとやら申升 主「それハ小供たらしにこそいふ  
汝が行になんのかこせ仕ふ此桶ハひさうの桶なれども汝にかすほど  
に大せつにして持て行け 太「かしこまつてムる 主「早ふゆけ 太  
「ハア是ハめいわくな事仰付られた参らずハなるまいさりながら  
此たび一度ならバ参りもいたそふかおきやくが有たびごと清水へ  
いて水を汲でこいと仰られるで有ふ所で何とぞ参りとミないもので  
ムるイヤ此桶をまつこゝ元においてのふおそろしやたれもいぬかで  
やいくく 主「表が一向さハがしいあれハたしかに太郎くわしや  
がこへじやがヤいく身共しやなんとしたく 太「コレハたのふた  
御方てムるか跡から唯も追てハ見へ升ぬか 主「たれもおふてハこ  
ぬか何とした 太「まつ御きゝなされ升せい何か清水へ参り升て青  
みどりをかきのけ中なる清き所を汲ふと致し升たればうしろの山が  
なり升といかめの鬼が出升ておのれ七ツ下て此所へ来るハ武へんた  
てゝ有ふあたまから一口に仕てくれふと申升た 主「夫ハおそろし  
い事で有たが清水に鬼の出るといふ事ハ聞かなんだがして桶ハなん  
とした 太「桶ハ余り鬼がけハしい追て参り升ゆへ鬼の目とはなと  
思しき所へ打付て帰り升た 主「イヤこゝな者かひさうの桶打付て  
来たといふことか有ふか 「テモ太郎くわしや一人御拾ひ被成たと

思召升せ 主「汝一人や二人とかへる桶てハないいかにしても桶が  
おしい見て参る 太「御出被成たり共桶ハムり升まい 主「トハ又  
どのやうな事じや 太「にげく見升たればぐわりくと鬼が桶をか  
ミわる音がいたし升た 主「それきかばいよく桶がおしい見て参る  
「夫方桶を見に清水へ参る太郎鬼のめんきて主をいろいろおどし身  
かつて斗りいふ夫方主かへる太郎ハ主をむかいに行ていにて主太郎  
にあふて 主「清水の鬼が汝のヒイキしていたが汝ハ鬼と一門でハ  
ないか 太「それハ何と申升た 主「イヤいろくと汝がヒイキいふ  
た 太「私ハ鬼に一門ハ持升ぬか私か曾祖父のおばが鬼で有た申升  
主「おそろしいあちへうせい 太「それハむかしの事でムり升 主「そ  
れならハなんじが清水へいたとき鬼ハなんといふた 太「おのれ七  
ツ下てくるハ武へんだてゝ有ふいで一口に仕てくれふと申升た 主  
「これハいかな事今太郎くわじやの声と清水の鬼の声と一ツでムる  
これハ太郎くわじやがそれかしをなふりおつたと見へるト「それ方  
又清水へ行太郎又鬼のすがたになりて跡方行此度ハ鬼のめんをさか  
さまにかふりてい主これを見つけ 主「おのれ面かさかさまじや  
わいやい 太「これハたのふだ御人 主「おのれハ主をたばかつて  
此やうなめんをかぶりそれかしをおとしおるもはやりよけんならぬ  
せいばいをいたす 太「何とそ命はかりハおたすけ被下 主「そふ  
あらバたすけてやらふが鬼のふりが上手しやよつて鬼のまねをして  
見せいたすけてやらふ 落 主「中くおもしろい事で有たその  
ごとく鬼のふりができるのになせ外でハ踊らぬぞ 太「そんなら  
是が振ハ内<sup>ニ</sup>「おにハそらをしてゝあろ

文使もんづかひ 主 太郎くわじや／二郎くわじや

「是ハ此当りの者ものでムる兩人の者をよび出しさる方へつかひにやろふと存るヤイク太郎くわじや二郎くわじや有かヤイ 太「ハア御前ごまへにおり升 主「はやかつた汝等なまぢよび出す事別の事ことでもない此文をこのかの方へもつてゆけ 二人「かしこまつてムる此御状ごじやうばかりなれば二郎くわじや一人遣つかハされ私ハやとにおり升ふ 主「イヤく一人やれハ道みちよりをするゆへ二人やるへんじを取たらハはやうかへれ 二人「かしこまつてムる 主「いていはふには此中ハ打たへて人をもしんじ升のぼなんだ余あまりにゆかしさにふミをいて申升といふていてこい 二人「かしこまつてムる 主「早はやふかへれ 二人「ハア 太「二郎くわじや文を遣ハさるゝ一人でもよいに二人を遣ハさるゝハそちが常つねとじやうだんをするゆへじや 二「イヤそちが道みちよりするゆへじや 太「ヤア先まづにから身共みどもが持もたそちもて 二「どれく身共みどもも持もたふこちへおこせ此たびハはやふかへそふぞ 太「中なかつとその通りじや 二「ヤアよほどもつたサア又もて 太「ハテさておもしろいものでハなし先もて 二「イヤく持もつことハならぬ下に置おくぞ 「ヤイクそれならハよい事がある竹たけにゆひ付つて二人してになふてゆかふ 二「これハ一だんの事じやサアゆひ付 太「心得たサアよいハこゝをかたげ身共みどももかたげるこれくこれでよい又身みとものほうへよせたと見へていかうおもふなつた 二「よせハせぬ中に有ハ 太「しからハチト小うたをうたふて行ふ 二人〇哥うたしめじが腹立はらたやよしなき恋こゝろをするがな

るふじで見れどもおらばこそくるしやひとりねのわがたまくらのかたかへてもてどももたれぬそのなんのおもにぞ 太「此文このが此やうにおもからふよふがないがさてハ此ふミか恋こゝろの文じやよつておもと見ゆるどのやうな事ことが書いて有るによつておもひひらいて見やうでハないか 二「そのやうなむさとした事ハよしにせい 太「イヤ又あとを元のやうにふうじておいたらよい 二「よしにせいこれハはやひらいたハ 太「なふくいつぞやのかたじけなさ何なに恋こゝろしき事ハ山やまとあるハ 二「これハ又おもひはずじや是へ見せ 太「まづまて 二「まづ見せい 太「これハいかなこと文ぶんを引ひきいたハ 二「是ハ此まゝでハ持もつていけまい た「此あたりよりあをいでやろ 二「是ハ一だんじや 太「又ちとうたあふ 二「一だんとよからふ 二人「加茂かものの河原かはらをとをるとてふミをおとした夜よの風のたよりにつたへどゞけかし 太「あをげく↑此所へ主母に参り兩人して文を引さきあをいでているを見て 主「ヤイク大事だいじの文ぶんを是こゝ何なにとしをる 二「ア、是ハゆるさせられくとしてつかまますやうらんになり舞ままもふ 主「ヤイク又身共みどもを此やうにたらかしおつた 太「是ハゆるさせられ 主「あの大おほちやくもの 落おち 「やるまいぞく

板元表米

腹立はらた不立たてず 庄はらたや 百姓ひやくしやう／坊主ぼくしゆ

庄はらた「是ハ連れんしや物ものでムるさても当村あたむらにおいてあき寺てらを再さいこんいたしたによつて是こゝに入いるお主ぬし持もたがないによつて上下じやうげのかい道みちへ参まゐり似にやわしい出家しゅつげが有あつれかへろうと存ぞんるそれに付村つむらの者もの一人ひとりさそふて参まゐる↑これだけの語彙用道してか連 坊ぼく「なむあミだ仏ぶつくく 庄はらた「アレ一だんの

出家が見へる 百「そふ有バつれてかへり升ふか 庄「ようムるのうく御坊あなたハどれからとれへいきやしやり升 坊「わたくしハ寺もちでムらぬによつて風に木のはのちるごとく行たいまゝに行事でムる 庄「そふあらバ私が村にあき寺がムるが何卒すハつて被下ぬか 坊「何どきでも参り升ふ 庄「シテ御坊の名ハ何と申升 坊「私が名ハ腹不立の正直坊私ハどのやうな事いわれても腹不立正直な者でムるによつてそれゆへ不腹立の正直坊と申す 兩人「ナントあの坊主おもしろい名でムるなぶてやり升ふ腹を立すバつれて帰り升ふこれよりいふことなる坊主をばらばらとていふ 庄「御坊ハどのやうな事でも腹たてずといふたでないか 坊「腹立てんなれともがうがわくおのれ人にうらミが有物かない物か今夜のうちにとりころしてくれト大いまいとせりは人徳のりくもなき 庄「今の坊主がくもに成てまいりそれがしにうどん見たやうな物をかけよつた 落 「あの坊主ハうどんなやつじやくもかすミに逃ていきよつたわい

板元表米

照葉 芥川 △しやうがノ□ちんば  
「いつぼう手のふちうな物と又ハちんばと西ノ宮へ参詣思ふく致ちんば跡に成ところで芥川をしよがいてちんばの手をとり渡してやり其ときちんばをミつけわるくちの哥に津の国の浪花渡りにきて見れハあしのもとこそおかしかりけり △これハたゞきかしてハおもしろふもおかしうもないがこなたの足の元こそおかしかりけり  
「ちんば腹たて □なにとぞしやうがのかたてをださしたい物とお

もひこゝわ芥川と申せど水ハ清水に御坐るによつてちよづをつかうてゆかせられと 「いふにむりにつかわす其ときちんばしやうかを見付 △こなたいまちよづつかうたのミて一しゆおもひよりたりと申て芥川ちりふりなかつ手を見れハあしのもとよりおかしかりけりこれもたゞきかしてハおもしろふもないこなたの手をミればく△又一人ハ足のもとこそくと度といひあひ夫より相撲となるしやうがおもしろい手がまハラぬゆへにまける △かつたぞく 落 「此大勢の人中ではじかみをかゝしたな

照葉 舟渡聲 △むこ □舟さし渡男ノ○しうと女

△「是ハ此あたりの者てムる今日ハ最上吉日でムるよつてこれ方聲入をいたそふと存る山一ツあなた的事でムれば此やうに樽肴を持て参る事てムるまづそろくと参ふト直行有てはいいでわしをよけおの角を離さかたを先業さなれば舟もちませやうに船けれバいづくことよりけれバ □「アゝさむいく手がこぞへて舟がながれるく △「アゝコレくちやつと留て下され酒ハのまし升ふぞ □「何酒をのまして下さる事なればいかほど寒ふてもさし升ふぞ △「さあくすこししんぜ升ふ □「ヲ、ト是ハちやうとムる △「ちとうたひ升ふか □「一だんとようムり升 △「ざんざんはま松の音ハ □「よいやく又しやくいたし升ふ △「またうたひ升ふ山田山瀬のわたし舟よるハかよふ人なくとも月のさそハもろともに舟もこがれいづらんふな人もこがれ入らん □「又しやくいたし升ふ △「ホイ是ハ酒がみなに成升た □「是ハ氣のどくな事てムるイヤ舟が付升たサア上らせられ舟のちり上道行有てし △「何かと申内にはや是でムる ト「あん内をこうて



板元表米

瓜盗人 はた主 瓜盗人

主「是ハ此あたりのはた主でムる当年ハうりハなりとしてムるよう  
できてムるこれよりはたへ見舞ふとぞんする」「これハさてもく  
ようてきたり此やうなときハゑてハしらさるがわるい事したがるも  
のじや案山子是につくるふておかうぬ「是ハ此当り  
の者てムるがそれがしにちやうほうをもつてあなたこなたへ参り其  
日をおくる者でムる此比ハうりのいろつく時分なれバうりはたへ参  
り一ツ二ツしよもふいたそふと存する 此ハ又きびしいかきが  
いふてあるしよきやうりをとりかへる 主「また今日も見舞ふとぞんするト」「い  
ふてはたへ行うりはたけのあれてあるを見て大きにはらを立うり主  
案山子になりかハリまつている所へ又うりぬす人出てくるかゝしを  
見まことのかゝしとおもひいろく一人言いふてあやまりなどする  
事あり此ときかゝしの中方うり主とんでいで竹を持ってつきかゝり政  
右衛門の見ふりになりて伝受ばのたてにていろく取合ありぬ「こ  
なたハうり主でハないか 主「ようもく此やうに此間といふ又今日  
といふでんじをあらしにきおつたなぬ「そんなら今日のハやりの  
でんじゆばでハなふて 落 「是ハそれがしがでんぢをいかふあら  
しおつたわい

板元表米

△大名 ○太郎冠者 □猿引／○猿

△「コレハかくれもない大名此間ハいづ方へも行かぬよつて気がく  
つして悪いけふハ何方へぞちよやふと存るヤイクのさ者おるか  
○「ハア △「おるかく ○「ハア △「いたか ○「御前に 「ね  
んなふはやかつた此間ハ何方へも出ぬよつて気がくつしてあしいけ  
ふハ野遊に参らふと存る何とじや ○「これハ一段とよふムリ升  
△「その義ならハ直に行ふ供せい ○「かしこまつてムる △「サア  
くこいく ○「参り升く △「さてけふハものかずかした物じ  
や ○「おこぶしのほとが見たふムリ升 △「サアくゆけくヤイ  
太郎くわじやあれへ来たハさる引でハないか ○「さる引でムリ升  
△「あれハ能さるか又あらいかたつねてこい ○「ヤイク猿曳あれ  
ハ能さるか但しハあらいか □「イヤ能さるでムつてげいをいたし  
升 △「それハ毛並のよいさるじやな □「きやつく ○「ア、  
コレあらくバあらいとおしやればよいに □「ついにあのやうな事  
ハムリ升せぬがたのうだお方の御出立におそれ取つて出ました物  
でかな有ふと存升 ○「イヤ申上ついにあのやうな事をいたした  
事ハムリ升ぬかたのふだ御かたのお出たちにおそれてさるが取て出  
ました物でかなムリ升ふと申升 △「くるしうないゆるすといへ  
○「かしこまつてムるくるしうないゆるすと仰らるゝ □「たのふ  
だお方の御きげんもいかゞと存升たにそれハかたしけなふムリ升  
△「ヤイ太郎くわじや ○「ハア 「行い言ふにハ猿曳にちとむし  
んが有が聞てくれまいかとふてこい ○「かしこまつてムるヤイク  
さるひきちとむしんがあるが聞てくれふかと仰られる 次へつゞく  
うつほさる前 前のつゞき □「わたくしつれに御むしんハムリ升まい

なれとも身におう応じました御用なればうけ給り升ふ ○「イヤ申上  
身にかない升た御用なれば何なりともうけ給はり升ふと申升 △  
「ヤイクさる引むしんの言ふとあれバ聞ふとあつて忝かたげふムる  
□「これハけつかうなる御礼めいわくに存升 △「ヤイ太郎くわじ  
や行いい言ふにハ此うつばを内とさる皮うつばにいたしたけれどあ  
たりに似に合あいしさるがないあのさるハ大きうもあり又毛並けなもよいさ  
るじやよつてうつばにかけたいあのさるの皮かをかしてくれとい  
へ ○「かしこまつてムるヤイクさる引あのうつばを内とさる皮う  
つばになされたけれどあたりに似に合あいしさるかないあのさるハ大  
きうも有毛並けなもよいよつてさるの皮かをかせいと仰おらるゝ □「た  
のうだおかたの御おんきげんもいかゝとぞんじましたにおおざれ事を仰おら  
れるやうでさる引よるこびており升 ○「イヤおおざれ事ではないし  
んじつしや □「あの御おん眞実しんじつでムるか ○「中と □「その義ぎならバ  
あの猿さるハ生いて居お升まによつてかす事ことハなり升ぬと申上まて下くだされ ○  
「心得こころえた申上ま升まあのさるハ生いて居お升まゆへかす事ことハなり升せぬと申升  
△「かつたれば返かへすまい夫おもふてじや有あふ二三年にかけたれば跡あとハ  
かへすといへ ○「心得こころえ升またヤイ猿さる夷ひ夫おハかつたぞなれハかへすま  
いと思おもふて有あふ二三年にかけたれば跡あとハかへすと仰おられる □「ま  
だ御おんがてんが参まり升ぬかあのさるハ生いて居お升まによつて皮かをかし升れ  
ハ命いのちが失う升まよつて成な升ぬと申上まて下くだされ ○「イヤ申上ま升まあのさる  
ハ生いて居お升まによつて皮かをかし升れハ命いのちが失う升まよつてかす事ことハなり升  
ぬと申升 △「ヤイさる引ひさいせん無む心しんの言ことふとてあれバ聞ふと有  
て一い礼れい迄いた言ことして今いまに成なて辞じ退たいじやな □「生いて居お升まによつてかす事

なり升ぬ △「おのれていといふか □「ていといふたら何とする  
△「おのれ目めにもの見みせふそのけく よびてある引を舞をまハし升ふ □「まづ  
またせられい △「ナントまてとハ □「かし升ふ △「そふこそあ  
らふすれはやうかせといへ □「アノ大おかりまたでいさせら升たれ  
バさるの皮かにきつか付つてわるふムるによつてここにさるのうちと  
申事ことがムるよつて此こ方かた打うてさし上げ升ふおん能あたるにはんこうやかく  
ハ御おんせいばいになり升共ともさるをころすことハなり升ぬ △「其その義ぎな  
らバさるハたすけてやらふといへ ○「かしこまつてムるさるハた  
すけると仰おられる □「其その義ぎなれハ御おん礼れに舞まをまハし升ふ △「其  
義ぎなら早はやふ舞ませいといへ ○「心得こころえ升また早はやふ舞ませと仰おられる □「心  
得こころえ升また 一さるに舞をまハす ○「哥うたえんにや一いのへイタテ二にのへイタテ三ににくろ  
ごましなのを取とれとまれくをながめつなを千せん秋しゅうや万ばん歳さいの俵をか  
さねてめんくに俵わたをかさねてめんくに俵わたをかさねてめんくにた  
のしうなるこそめでたけれ 落 △「イハヤア

〔付記〕本稿は平成二十六年度と平成二十九年度科学学研究費補助金・基盤研究  
(C)「加賀藩を事例とする近世能楽史の地方展開についての研究」の研究成  
果の一部である。